こういう人たちだって『ガロ』から出てるんですよ。

長井勝一（青林堂会長）

――今回は『ガロ』出身の超メジャー、矢口さんと池上さんにお話を伺ったんですが、お二人のお話も含めて、いろいろ長井さんにもお聞きしたい、ということなんです。

長井　そうだね、その二人だろうね。矢口さんはね、一番最初の作品は凄く…『雷電為右ヱ門』て作品持って来たんでてよね。相撲の。いわゆる『講談調』ってあるでしょ、凄く芝居がかった、ああいった調子だったんだよね。早く言えば古臭い、っていう。だから「ちょっと無理じゃないかな…」って言って、その間二、三本あって今度が『長持唄考』、あれならどこ持ってっても恥ずかしくないから。熱心に持って来てたよ。一番最初のは独創性がないというか、何かを見てそれを漫画にした、って感じだったからね。それが入選した『長持…』になると完全に彼の頭から出てきた作品で創造性が十分あった訳だから。

――インタビューで矢口さんは「『ガロ』にちょっとしか描かないで日和ったんじゃないか」と言われるかも知れないけれども、僕と池上さんは違うと思ってる」と。

長井　そんな事あないと思うよね。その人その人の道があるんだから。『ガロ』に入選して世間から認めてもらったんだから、こうしろああしろとは言えないよね。生活があるんだから。で、彼の場合小学館に行って、そしたら小学館の人が感心に彼のとこまで行ったんだから。その時はたしか原作付きだったんだよね。それでなんとか生活出来る、という事になって。たしか矢口の渡しってのが二子玉川の方にあるんだけど、ペンネームの「矢口」ね。彼の叔父さんがそこで料理屋やってて、御馳走になったんだよ。その当時はもう小学館で何本かやってたんじゃないかな。で、これなら家族食わしてやってける、と自信ついたんじゃないかな。小学館のたしか…田中君て言ったかな、彼が「長井さん、助けると思って誰か紹介して下さい」って来たんだよ。永島（慎二）さんが『柔道一直線』で梶原一騎と大喧嘩やったんだよ。あの人も気の強い人だから。で、さっさと降りちゃったんだよね。ストックがあんまり無くて、それで慌てて来たんだよ。で、「この人上手くなるから、使ってごらんなさい、太鼓判押すから」って言ったんだよ。…池上さんの絵も最初はひどかったんだよな（笑）、あの船の話。

――『罪の意識』ですか。

長井　そうそう。あれから見たら今の池上さん想像出来ないよな。今なんか

日本でも絵の上手さじゃ指折りだろ。本当にトップだと思うよ。でもやっぱり最初はあだったんだよ。だけど上手くなる素質ってのは判るよね。いくら描いても上手くならない人もいるんだよ。

——その辺は矢口さんもおっしゃってましたね。天賦のものがあるんじゃないか、と。

長井　そりゃ確かにそうなの。でもね、下手な人は下手なりに、ずっと続けてくとちゃんと味が出てくるんだよ。見る方も安心感が出てくる。根本(敬)の絵なんかすさまじいだろ(笑)。でもずっと見てると「ああ、根本さんの絵だ」って定着してくる。そういう味わいが出るんだよ。蛭子さんも蛭子さんなりの味が出てきてるんだなあ。

——その辺で今度池上さんのお話なんですが、最初は上手いとは思わなかった。

長井　そう。僕はね、『罪の意識』の時にね、この人絵が上手くなるだろうし、ストーリーを物凄く大事にする人だと思った。で、やっぱり社会正義というものにかなり拘る人だったから、描かせると面白くなるんじゃないかな、と思ってるうちにとにかく上京したい、と。そしたら水木さんが「誰かアシスタントいないか」と言うんで「池上君というのがいるからガロ見てごらん」つったら「これは……」と言うんで「大丈夫、上手くなるから、あんたが仕込めば絶対上手くなるから」つったんだよ。で、「俺の仕事で呼ぶんじゃなくてあんたのアシスタントで呼ぶんだから、こうしよう、こっちも『この人いい』って勧めてるんだから半分出そう。あんたも都合つけて半分出しなよ、交通費と宿泊費」って。で、送ってやったんだよね。それは池上君も知ってるよ。それで今だに恩に着てくれるよね。でも不思議だよね、水木さんとこへ行った人はみんな上手くなったよね。

——そうですよね。一時は凄い顔ぶれでしたもんね。…で、お二人が漫画家で名を成した、やはり『ガロ』出身者では一番というか。

長井　そうだよね。絵を見ればこれは池上さん、これは矢口さん、と判るというのはね。

——長井さんはプロダクション製作方式というものはどういう風に考えてますか。

長井　必要だと思うね。量産するんであればね。量産するんでなければ、自分のものを自分でこつこつ、つげさんみたいにやるのが一つの方法だろうし。やっぱり有名になれば量産せにゃならんし、スタッフ食わせなきゃならんし。小説なんかと違って、一本一本の線で、いろんな線の塊が絵になるんであって、文字じゃないからねえ。ある程度は自分で描いて、あと埋める作業はアシスタントに任せりゃいいけどさ、全体の構図から何からは自分の頭から引き出す、ストーリーも自分で作んなきゃならない訳でしょ。小説を口述させるような訳にゃいかないからね。だから自分で手を抜けるところは回りのスタッフにやって貰わにゃ量産は不可能だからね。矢口さんはそういうところ上手いよな、ストーリー。池上さんはお話が暗いの。で、回りが結局は見かねちゃって、原作付きになるのよね。だけど池上さんは池上さんで、そんなの描きたいんじゃなくて、うちで描いたようなのを描きたいんだよ。

——それは池上さん自身もおっしゃってましたね。メジャーとマイナーというお話を、今回メジャーになられたお二人にお伺いしてきたんですが、長井さん自身はどう思いますか。

長井　結局さ、池上さんだってマイナーなんだよ。だけどさ、生活ってものを考えたりした場合、何としても有名になりたい、というのがあったんじゃないかな。だからずっとマイナーでやってる人、(鈴木)翁二なんかはマイナーでやって来てるでしょ。それは環境が許すか、意思が強いかどっちかだと俺は思うね。人間いろいろ端が思うより悩んだり考えたり、そうしてるうちに道が定まって行くもんだから。本来池上さんもマイナーでやりたかったんだと思うよね。そういう点楠(勝平)さんなんかは最低限食えりゃいい、という感じだったからね。

——『ガロ』出身を代表する有名作家で、功成り名を遂げたお二人なんですが、池上さんは自分自身はマイナーであり、家庭的な事もあって運命の不可抗力というか、メジャーに行かざるを得なかった。矢口さんの方は最初から絵柄もストーリーもメジャーの水が合っていた。好対象なんですが、結果

的にはお二人とも成功したのは面白いですね。

長井　そうだねえ。人ってのは皆運命、逆らえないものに支配されてると思うわな。

──そういうところを見抜く目が長井さんにはあったのではないか、とお二人ともおっしゃってますね。

長井　自分ではその時点では判らないから、そう言われるとそうかな、と思える人に言われるとそう思えるんだろうね。池上さんの『地球儀』はいいよねー。俺なんかあれ見た時は衝撃受けたね。ジェット機をつついたら落ちてくところとかね。凄いな、と思ったね。妄想か現実か判らない、というような。あれは楠さんを連想して描いてたんじゃないか、と思うけどね。お互いに相手の作品を意識し合ってたんだと思うよ。

──今回メジャーになったお二人にお話を伺ったという事に一つの意味に、今『ガロ』をフィールドにして描かれてる作家の方、またこれから投稿して来る漫画家志望の方々にも一つの…

長井　メッセージだよね。別に『ガロ』に描いたからといって、ずっと描けという事じゃないし、描いて頂ければありがたい、という事だろうし。

──池上さんは、『ガロ』におけるいわゆる「ヘタウマ」ものについて、結局「正統派の劇画」というものがあれば「カムイ伝」だった、それが終わる頃に林静一さんや佐々木マキさんが出てきて、その時代から変わっていない、つまり対立点にある正統派の劇画というものが無いだけである、とおっしゃってました。また、矢口さんは一種絵の精進を怠っているという見方もある、という事でしたが、長井さんは今流行っている…というか近年出てきたそういう反正統派（？）の漫画についてはどうお考えですか。

長井　結局それだけ描ける奴が少ないって事だと思うよ（笑）。描ける人はいるよ、だけどもう一人でやってるのじゃないでしょ。描き込んで手間隙かけてね。そうすると当然スタッフ抱えて、それら食わせにゃならん訳でしょ。そうすると『ガロ』なんかでね、遊びやってられるか、というのはあるわね。でも正統派の人たちったって、そんなに力のある人って少ないからね。だから誰とは言わないけどいわゆる劇画の大家がああやっていられるんだよ（笑）。若い人でどんどん正統派の人が出てきたらあの人達だって追い出されちゃうんだと思うよ。でも追い越せねえんだよ（笑）。本当はどんな世界だって下から突き上げられて彫落してくのが常なのに30年もあんなしんどい作業やってられる、ってのは回りも悪いんだよ。

──（笑）弱い横綱をいつまでも張らせてるみたいな。…今「感性」とか、よく判らないもので簡単に「いいじゃん！」なんて言ってますけど、それは危険な面も多分にありますよね。素人が書きなぐった「ような」絵でもいいんだとか、そういう訳のわからない事で評価するのはどうだろうか、と。

長井　そうなんだよね。基本的にちゃんとしたものをマスターしてから自分の物の考え方が絵になり、ストーリーになるはずだからね。だけどそうじゃなくてさ、描けないからって逃げてちゃいかんよね。努力しなけりゃ向上しないですよ。蛭子さんにしても絵をカバーして余りある個性があったからこそ持ったんで、持ったから味が出てきたんだから。湯村さんの絵だってさ、描けそうに思っちゃうんだけど、なかなか描けないよ。見てこの人の絵だ、と判らなくちゃ駄目なんだよね。こういう絵でなくちゃいかん、というものは無いけどさ。

──だからそういう点で行くと、今『ガロ』というのは、既成のスタイルとか「正統派」というか、そういったものを揶揄したり笑ったり、そうでなければいけない、そういうひねくれたものしか取ってくれないというような誤解があるように思うんです。でも決してそういう訳ではない、という。

長井　そうそう。だから池上さんや矢口さん、こういう人達だって『ガロ』から出てるんですよ、とね。やっぱりそれはいい事ですよ（笑）。

■収録…1992・6・15
東京・阿佐谷の自宅にて
■文責…『ガロ』編集部